

戦前の「講談調」野球実況は なぜ人気となったのか

～放送種目割合や聴取者意向から検証する～

メディア研究部 小林利行

本稿では、1930年前後に大人気となった松内則三アナウンサーの「講談調」の野球実況について、これまでにないアプローチでその人気の背景の再分析を試みた。

本稿ではまず、「報道」「教養」「娯楽」などの放送番組の種目割合の時系列変化に注目した。そして、「娯楽」の割合が減少している時期とこの実況の全盛期が重なることを示したうえで、これをベースとして以下の3つの視点から人気の背景を探った。

【①聴取者】聴取者は「娯楽」を求めていたが、実際の放送では十分に供給されておらず、「娯楽」の少なさに不満を持っていた。【②松内則三】アナウンスのあり方において常に聴取者の意向を重視していた松内が、野球実況を「講談調」にした理由の一つに①が関係した可能性が高い。【③日本放送協会】聴取者加入が外国に比べて進まない要因の一つは「娯楽」の少なさと認識していたと思われるが、「社会の公器」という建前上、いたずらに「娯楽」を増やすわけにもいかなかった。そこに登場したのがこの実況であり、客観性に疑問符がつくアナウンスながらも容認する姿勢をとったと推察される。

先行研究で指摘されているように、この実況の人気の背景には、「講談調」という日本人になじみのある口調が広く受け入れられたことがあるのは間違いない。これに上記の3つの視点を加えることで、この実況の誕生と継続の解釈に厚みが増し、従来の野球ファン以外を取り込んで大人気となった背景をより明確にできるのではないだろうか。

1 はじめに

ラジオ放送が始まって間もない1920年代後半から1930年代前半にかけて、野球の実況放送が大人気となった。この実況の中心となったのは日本放送協会の松内則三アナウンサーだった。松内の独特の口調による早慶戦はレコードとしても発売され、10万枚売れば大ヒットといわれた時代に、歌謡曲でもないのに15万枚のセールスを記録した。一種の社会現象ともいえる出来事であった。

これはメディア史として注目されている事象であり、多くの先行研究がある。例えば、竹山昭子の『ラジオの時代』¹⁾、橋本一夫の『日本スポーツ放送史』²⁾のほか、山口誠³⁾や南利明⁴⁾の研究などがあり、竹山はその実況ス

タイルについて「江戸期以来庶民に親しまれてきた演芸路線を継承して、『話芸』の巧みさによって人びとの興味を得るものであった」⁵⁾などと、また山口はそのアナウンスを「擬講談調」としたうえで、「先行する話芸から古いオラリティを借用して、新しいラジオのライブ性を実現しようとした」⁶⁾などとしている。

これらからも分かるとおり、先行研究では主にアナウンスの内容が分析の中心となっている。本稿では、こうした先行研究に立脚しながらも、放送種目の割合や聴取者の意向に注目したこれまでにないアプローチで大ブームの背景、特にその誕生と継続についての分析を試みる。資料としては、当時の雑誌、アナウンサーの手記、日本放送協会の放送研究誌、『ラジオ年鑑』、NHKが編さんした各放

送史などを用いる。

当時の野球実況は松内のほか、1936年のベルリンオリンピックの「前畑がんばれ」で有名な河西三省アナウンサーなども担当したが、本稿では中心的に活躍した松内の実況に焦点を当てる。そしてその時期の松内のアナウンスを、その前後の野球実況と区別するために「野球話術実況」と呼ぶ。これは、先行研究でも指摘されているように、古典的な話芸をベースとしていると思われるからである。

本稿の構成としては、まず松内の野球実況の内容を分析し、その魅力を確認する。そして、「報道」「教養」「娯楽」といった当時の放送種目の割合の時系列変化など、いくつかのデータや史料に注目して本稿の主張となる根拠を示し、「野球話術実況」の人気の背景を考察する。

戦前の放送局の名称は、時期によって「東京放送局」「東京中央放送局」などと異なるが、本稿では「東京放送局」のように統一する。また日本放送協会は「協会」と略す。

2 松内の「野球話術実況」

(1) 松内の入局と野球実況の始まり

松内は、放送が始まった1925（大正14）年に東京放送局に入局している。はじめはアナウンサーではなく、日用品の物価の取材を担当していた。松内は慶応大学を卒業したあと、東京市市場協会に勤めていたことがあった⁷⁾。このため、日用品の値段に詳しいだろうと物価の担当となったという。しかし松内は、自分が取材したことをほかのアナウンサーに間違えて伝えられてはかなわないと、たびたび自らマイクに向かっていった。そのうち度



NO IMAGE

松内則三 1934年4月17日撮影

胸と器用さを買われて、当時少なかったアナウンサーの1人になったという。

日本で初めての野球実況⁸⁾は、1927年8月13日に甲子園で行われた第13回全国中等学校優勝野球大会であり、大阪放送局の魚谷忠アナウンサーが担当した。この実況の始まりには興味深いエピソードが残っている。当時の放送内容は通信省に厳重に監督されていて、アナウンスメントについても原稿にして事前にチェックを受けていた。しかし、野球実況も同じような手続きを踏むとなると、どう考えてもプレー内容を伝えるのが遅くなり「実況」は成り立たない。そこで大阪放送局が申し入れた結果、大阪通信局は「アナウンサーの実況描写放送は事実を伝えうるものとして大目に見る」と譲歩したという⁹⁾。

松内が初めて担当した野球実況は、このすぐあとの8月24日、神宮球場で行われた一高対三高の試合だった。そして、同年10月からは東京の六大学野球リーグ戦の実況放送が始まる。まさに1927年は日本のスポーツ実況に

関して記念すべき年であった。河西によると、当初、六大学野球は松内1人で担当していたが、大変になってきたので1929年の春から河西が応援に入るようになったという¹⁰⁾。

なお、初期のころの松内の口調は「講談調」ではなく、見たまを描写する客観的なものだった¹¹⁾。松内が独自のスタイルを確立する過程については後述する。

(2) 実況の内容

松内の「野球話術実況」は次第に大きな人気を集めるようになった。1929年度の統計によると、この年度だけで六大学野球を中心に50日も野球実況が放送された。しかも1日に2、3試合放送する日もあったので、試合回数としてはこれ以上になったという¹²⁾。

1931年ごろの放送内容の傾向を分析したりポートには、「運動競技の放送は素晴らしい人気を呼び、運動シーズンには聴取加入者の増加を見る外、ラジオ相談所、ラジオ商等が故障相談に多忙を極める程である」と記されている¹³⁾。またNHKが編さんした『日本放送史』でも、「ことに早慶戦の際は、ラジオ受信機の前に多数のファンをくぎづけにして熱狂させた」と述べられている¹⁴⁾。当時、相撲なども実況されていたが、スポーツ実況の大半は野球であった。

実況は放送されるだけでなく、雑誌に掲載されたりレコードに収録されたりして売り出されるようになった。特に1930年にポリドールから発売された『早慶大野球戦』というレコードは、本稿の冒頭で触れたように大に売れた。

このレコードは、松内がポリドールのスタジオで吹き込んだ架空の試合内容であった。

もちろん収録時間などの制約があって実況をそのまま録音することが難しかったのであろうが、飛ぶように売れたレコードが、見たままの実況（ノンフィクション）ではなく、創作された物語（フィクション）だったことは、人びとが「野球話術実況」の何に魅力を感じていたかを探るうえでも重要である。

では、実際の松内の実況内容はどのようなものだったのだろうか。雑誌『新青年』の1931年秋に発売された増刊号“決戦野球号”には、同年10月20日の早慶戦の実況を活字にしたものが掲載されている¹⁵⁾。試合開始前の選手紹介からゲームセットまで、ほぼすべてのアナウンスが字起こしされていて、全体で320ページのうち30ページもの誌面を割いている。その中の一部を実況順に引用する。

（以下、引用部分の下線はすべて筆者）

応援芸術の中にも、^{おのず}自から今日ばかりは殺気立って、風雲ただならざるものがあります。

杉田屋ベンチに戻って何事か大下監督の耳打ちであります。如何なる秘策、大下監督授けましたか？只今杉田屋ニコニコ笑ってボックスに這入るところ。気味の悪い杉田屋の笑いであります。果たして杉田屋のこの笑い、如何なるものを語って居りましょうか？

打ちましたがファウル。早稲田応援団の中に打揚がったファウル。ノープレー。唯今早稲田の応援立上って、頭に球の落ちるのも知らずに、ワーッワーッの応援。球は頭に落ちて如何にも痛い応援であります。

早稲田の応援団、鳴りを鎮めて居ります。
せつしやくわん
切齒扼腕、鳴りを鎮めて居ります。慶応の
追撃なお急か、早稲田の好防これを阻むか、
いよいよ
愈々戦い交えて第六回、

非常なファインプレー。打ちも打ったり、
受けも受けたり。

第一球は空振。その間にバットだけは内
野ヒットとなって、ピッチャーの足元に参
りました。ピッチャー危うしと逃げました
が、これはバットであります。

無敵の早稲田、旗風なびくか？陸の王者、
依然王者たる旗風なびくか？両軍ここを先
せん
途と盛に応援の応酬であります。

早稲田の応援団立ち上がりまして狂喜、
歡喜、乱舞 — 狂喜、歡喜、乱舞

夕暗迫る神宮球場。風雲ますます急、
あんたん
暗澹たる戦雲漲る。

非常なファインプレーであります。健棒
けんぼう
の冴え、俊足の誇りであります。

暮色蒼然、夕闇迫る神宮球場でありま
す。風雲いよいよ急であります。矢弾尽き
て唯々肉弾相撃つ接戦であります。

両軍の白熱戦、肉弾戦、肉弾相撃つ戦い、
残るもの肉弾、唯それ一つであります。

以上のような松内のアナウンスについて山
口は、「①漢語を多用した七五調の短文で、

②野球場に古典的な『対立の図式』を構築す
るという、擬講談調の野球実況」と分析して
いる¹⁶⁾。

ところで、講談は近年、静かなブームに
なっているようで、最近でもある週刊誌が巻
頭特集で講談を取り上げている。その中で現
役講談師の田辺銀冶は、「講談の面白さは、
日本語のリズムの心地良さです」と述べてい
る¹⁷⁾。ここに挙げた松内のアナウンスを読み
上げてみると分かるが、確かに七五調のリズ
ムが多用され、日本人の耳に心地良い響きと
なっている。

NO IMAGE

早慶戦の実況をする松内 1936年4月23日撮影

(3) 聴取者からの評価

レコードが15万枚も売れたことから分
かるように、多くの聴取者は「野球話術実況」
を好意的に捉えていた。作家の井上友一郎は、
以下のように述べている。

早慶戦というようなビッグゲームの実況
放送は、放送そのものが試合と切り離して
一種の芸術でしたよ。試合をおもしろくも、
つまらなくもする魔術を持っているわけで

すから。(中略)街頭でラジオの前へ一時間でも二時間でも立っていたんですから、やはりあれは一種の芸術品だった¹⁸⁾。

音楽評論家かねつねきよすけの兼常清佐や哲学者の谷川徹三らは、野球のアナウンスに関する座談会の中でこんなやり取りをしている。

〈兼常〉「ベースボールを見ようとは思いません。ただしゃべっていることが面白くって聞くのだが」

〈谷川〉「あれを聴いていると面白いが、行って見ると面白くなかったというようながありました」

〈兼常〉「あれは話術として面白い。まあ金語楼の落語みたいなようなもので」¹⁹⁾

“ベースボールを見ようとは思わない”“しゃべりが面白いから聞いている”などの発言に注目したい。そもそも、当時実力で日本一とみられていた六大学野球の人気は高かったが、「野球話術実況」は、野球ファン以外も取り込んで聴取者を広げていたことが分かる。

さらに座談会では、“落語みたいなもの”などという言葉も出てくる。確かに松内の実況内容を振り返っても、「球は頭に落ちて如何にも痛い応援であります。」「ピッチャー危うしと逃げましたが、これはバットであります。」など、“落ち”をつけるような表現も見受けられる。

このほかにも松内は、別の試合で実況の合間に当意即妙の川柳を詠むという芸当もこなしている。例えば、早稲田のキャプテンの伊丹が大事な場面で三振したときのことである。

キャプテンがいたみ入谷の三度振り²⁰⁾

このように、「講談調」のほかに「落語調」とも言うべき要素があったとも考えられる。ここで重要なことは、後述するように、当時の聴取者がラジオに求めているながらも十分に提供されていなかった講談・落語に似た語り口が、この実況の人気を支える要素の一つとなっていたということである。

以上のように人気を博した「野球話術実況」であったが、1932年以降、これに関する記事が雑誌や新聞に掲載されることが少なくなり、実際の野球実況も河西をはじめとするリアリティー重視派のアナウンサーが主流となって、30年代半ばにブームは終息した。

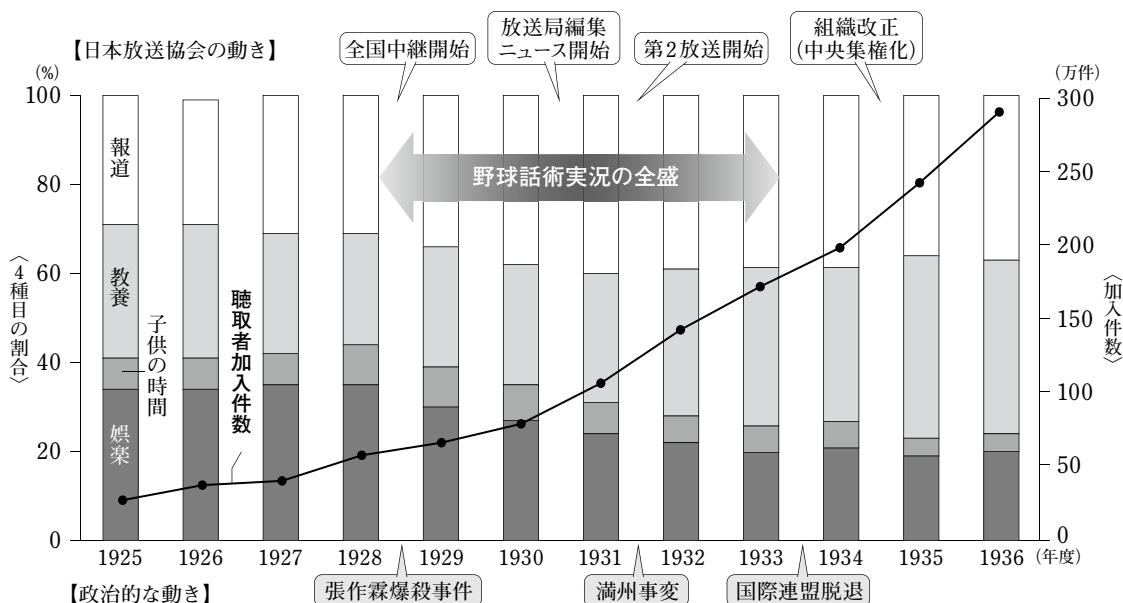
3 なぜ「講談調」実況が求められたのか

(1) 「娯楽」減少の中での隆盛

ここまで「野球話術実況」の魅力を確認してきたが、ここからは本稿の主張の根拠となるデータや史料を提示する。先に述べたように、先行研究には松内のアナウンスの内容から人気の背景を探ろうとするものが多いが、本稿ではほかの番組とのバランスや聴取者が放送に求めていたことなどを踏まえたアプローチを試みる。まずは、放送種目割合の時系列推移に注目する。

戦前の放送内容は「報道」「教養」「娯楽²¹⁾」の3つと、主に子ども向けの教養・娯楽番組を「子供の時間」とした合計4つの種目に分けられていた。日々の番組編成は、この4種目のバランスを考慮して決められていたのである。具体的には、「報道」がニュース・天

図1 放送種目割合と聴取者加入件数の推移



※『ラジオ年鑑』(昭和12・17年)などのデータをもとに筆者作成

気予報・経済市況・職業紹介・スポーツ実況など、「教養」が講話・語学・料理・ラジオ体操など、「娯楽」が講談・落語・浪花節・琵琶・管弦楽・ピアノ音楽などである。

図1は、放送を開始した1925年から1936年までの放送種目の割合を示したものである²²⁾。グラフを見て分かったとおり、1928年までは「報道」「教養」「娯楽」のどれかに偏っているわけではなく、強いて言えば「娯楽」がやや多いぐらいだった。ちなみに1928年の割合は「報道」30.8%、「教養」25.3%、「娯楽」34.9%となっている。しかし、1929年から「娯楽」の割合が徐々に下がり、1933年には19.6%にまで落ち込む。一方「報道」と「教養」は増加傾向となり、1933年でそれぞれ39.3%、35.5%となっている。

これらの要因として『昭和十二年ラジオ年鑑』では、「報道」はニュース・経済市況・気

象通報・実況中継などの番組が年々拡充され、「教養」は教育・教養番組を中心とした「第2放送」が1931年4月から始まったため、などと説明している²³⁾。さらに解説を加えれば、当初、ニュースは新聞社などから記事の提供を受けて編集なしで放送していたが、1930年11月から通信社からニュースを購入して協会で取捨選択・編集して放送する「放送局編集ニュース」が開始され、放送回数・時間とも増加している。さらに、図1の下に示したように、この時期には中国にいる日本軍の事などさまざまな動きがあり、講話やニュースとして伝えることが多くなってきたことも見逃せない。「娯楽」の割合が減らされた理由については後述する。

このグラフで注目したいのは、1928年から33年にかけての「娯楽」の相対的な減少と、

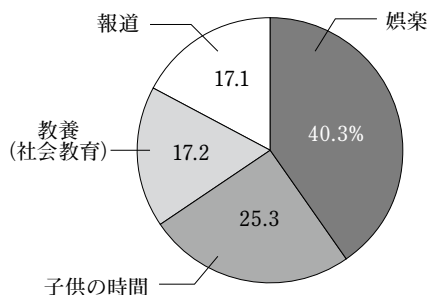
「野球話術実況」の全盛期が重なることである。形としては、「娯楽」の減少を埋めるように「野球話術実況」が広がっている。

(2) 聴取者は「娯楽」を求める

「報道」と「教養」に偏りつつあった放送種目について、聴取者はどう感じていたのだろうか。図2は、1931年4月から9月にかけて大阪放送局が管内の聴取者に対して行った調査の結果である²⁴⁾。好きな番組として最も多いのが「娯楽」で40.3%、2番目が「子供の時間」で25.3%となっている。ちなみに「子供の時間」の放送内容の半分以上は童謡・劇などの「娯楽」である。「娯楽」はさらに「演芸」「和楽」「洋楽」などに分かれていて、この中で最も好まれていたのが浪花節・講談・落語などを含む「演芸」で、「娯楽」全体の中で約40%を占めていた。

この時期には、各放送局において聴取者の意向を探るための調査が行われていた。この中で大阪放送局の調査は、調査票などの詳細な資料が残っているので結果も信頼できるものと判断して、本稿の中でグラフ化した。回答率

図2 聴取者の嗜好調査結果
(大阪放送局 1931年度)



日本放送協会関西支部
『ラヂオ聴取者は何を好むか?』(1932年)をもとに筆者作成

など不明確な部分があるものの、参考までにこのほかの局の調査結果を示すと、「娯楽」の希望は、東京放送局 52% (1928年)²⁵⁾、名古屋放送局 77.9% (1928年)²⁶⁾、広島放送局 47.4% (1930年)²⁷⁾で、いずれも「報道」「教養」より大幅に多くなっている。

これらの結果を図1と比べてみたい。そもそも放送の中での「娯楽」が聴取者の望む割合より少ないうえ、年々それと離れていっていることが分かる。

当時、聴取者調査と並んで人びとの意向を把握するために協会が重要視していたものに「投書」があった。実は、聴取者から協会への投書において、「娯楽」の少なさが直接的に非難されているのである。協会は1934年度から「投書」を分類整理して公表しているが、それによると、同年度中に全国の放送局に届いた番組編成に関する投書は382件であり、その中で最も多かったのは「現在のプログラムは大衆向きではない」といった内容のもので41件になるという。41件というと少なく感じるかもしれないが、投書に書かれていることは非常に多岐にわたるためまとめるのが難しく、そのほとんどが「1件」として扱われている。そんな中で40件以上が1つの意見に集中するのは珍しいことなのである。ちなみに2番目に多いのは「東京よりの中継希望」で9件であった²⁸⁾。

(3) 聴取者意向重視から「講談調」へ

こうした聴取者の意向について、松内がかなり気にしていたという記録がある。1950年に行われた戦前のスポーツ実況についての座談会の中で、アナウンスの向上策についての話が出たとき、松内はこう述べている。

僕は投書に対しては非常に科学的に調査して統計をとっていたが、どんな投書でもたんねんに見たものです²⁹⁾。

慶応大学理財科（現・経済学部）を卒業し、一時は株式関係の会社を自ら経営していたこともあった松内は、アナウンスのあり方についても聴取者からのデータを重視していたのだろう。こうした松内が、前記した聴取者調査の結果にも注意を払っていたであろうことは想像に難くない。

松内はまた、入局初期に日用品などの経済関係のアナウンスをしていたころの心がまえとして以下のように述べている。

その種目によって口を変えなければならぬ。日用品値段のときは家庭の奥さんたちにお話をするという気持ちでいねいに親しげに話し、経済市況は叱りつけるような口調で³⁰⁾、…

聞いている人のことを最大限に考慮して、その場その場に適した語り口を常に意識していたことが読み取れる。

前述したように、野球放送を始めたころの松内は客観的な描写を心がけていたが、そのアナウンスについて甲子園の野球を担当していた魚谷と比較されることがあった。魚谷は野球の名門中学でレギュラーだったこともあって、専門知識を生かした解説に定評があったが、これに比べると野球に関して素人同然の松内は分が悪かったという³¹⁾。こうした中で松内は以下のように述べている。

放送の標準はグット低い^{ところ}に置いて、お

爺さんお婆さんと迄は行かなくとも、少なくともあまり野球を見たことのない人が聞いても堪能して呉れる程度にグット砕けた放送を続け度と希^{たい}って居る³²⁾。

つまり松内は、▷聴取者の意向を重くみて、▷その場に適した語り口を意識し、▷野球の知識不足を補う意味もあって、従来とは異なる独自のアナウンスを模索していたのである。そしてその対象となる野球は、攻撃と守備が明確で対決の構図を描きやすいスポーツであった。こうしてみると、松内の野球実況が「講談調」になった背景が浮かび上がってくる。

(4) 協会側の事情：遅れていた聴取者加入

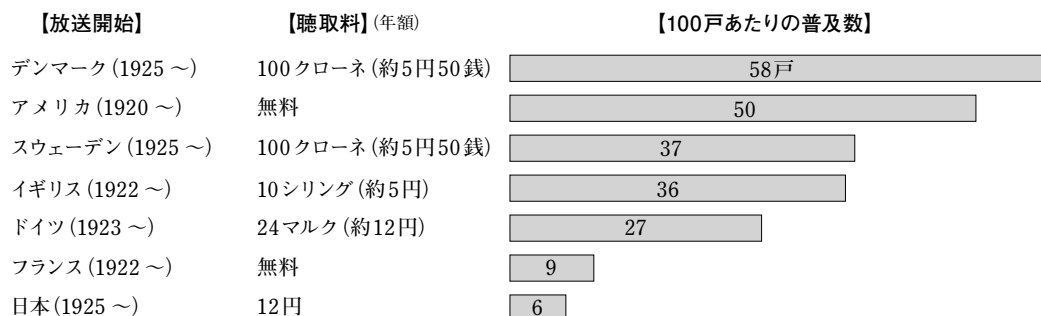
ここまで、聴取者と松内の立場から「野球話術実況」についてみてきたが、ここからは協会の対応について考察する。まず、当時の協会側の事情についてみていく。

当時の協会にとって、大きな関心事の一つに聴取者の加入状況があった。図3は、1930年ごろの各国の聴取者の加入状況を示したもので、それぞれの加入のための料金や放送開始時期も加えてある。

図を見て分かるように、主要国に比べて日本の加入状況は進んでいるとはいえなかった。放送開始時期が同じデンマークやスウェーデンより大幅に遅れている。また海外視察の報告書の中では、ともに無料のアメリカとフランスの加入率を比べて、聴取者の負担する金額の高低が必ずしも加入率の最大要因ではないとの見解が示されている³³⁾。「放送開始時期」も「聴取料」も最大要因ではないとすれば、ほかに何が考えられるだろうか。

時事新報の高橋桂二は、ある席上で協会の

図3 各国のラジオ普及状況 1930年ごろ



中山龍次『欧米に於ける放送事業 調査報告』(1931年9月) などをもとに筆者作成

矢部放送部長が「欧米のラジオは民衆の後援を受けているものは発達し、左うでないものは微々として振るわない」と語っていたと述べている³⁴⁾。これは、聴取者の望むものを供給することが、ラジオの広がりには不可欠であるという認識を示すものであろう。

アメリカで放送局として成功していたNBCの1933年1年間の放送種目割合は、「音楽」が55.5%を占めている³⁵⁾。また、1927年とやや時代はさかのぼるが、アメリカのラジオ雑誌が読者に理想のプログラム割合の調査を行ったところ、「音楽」類が平均で70%程度を占めたという³⁶⁾。なお、「音楽」が大半を占める番組編成はアメリカだけではなくヨーロッパにも共通していて、イギリスで57.2% (ナショナルプログラム1933.5.1～8.31)、フランスで64.4% (パリPTT局1933.9.1～12.31) となっている³⁷⁾。

先に述べたように、日本の放送は「娯楽」番組の需要と供給が乖離していて、聴取者から直接「大衆向きの編成ではない」と非難されてもいた。こうした状況の中で、「娯楽」の少なさを聴取者加入が遅れていた要因の一つとして協会が認識していたと考えてもおか

しくないだろう。

しかし、協会には「娯楽」を増やせない事情があった。山口も指摘するように、日本においては放送の公共性が強く認識されていて、講談や落語などの「くだけた番組」ばかりを大量に放送するわけにいかないと考えられていたのである³⁸⁾。

(5) 批判の中でのブーム継続の理由

以上のような協会側の事情を考慮したうえで、先行研究では必ずしも明らかになっていないと思われる問題についてみていく。それは、大げさで創作的であり客観的な描写とはいえないという批判が少なからずありながらも、なぜブームが4～5年続いたかということだ。

批判的な声として、例えば劇作家の瀬戸英一は以下のように述べている。

野球の実況放送などを聞いていると、アナウンスする諸君が少ししゃべりすぎだと思う。これは私自身の趣味かもしれないが、少しは聴取者に想像の世界を与えてもらいたい³⁹⁾。

作家の野上弥生子はさらに手厳しい。

ラジオがどの程度の仕合の経過を、もしくは球場の実景を伝えているかということは問題である。(中略) その取捨、選択、及びその表現の如何によって、真にあるものを伝えるというよりも、個性のある、こしらえられたるものを聴取者に与えることになる⁴⁰⁾。

また、48ページに示した座談会の中で、「あれを聴いていると面白いが、行って見ると面白くなかった」などと松内のアナウンスを評価する声に対して、参加者の1人で新聞記者・歌人の土岐善磨^{と き ぜんまろ}は次のように批判している。

そこに問題がある。面白くないものでも面白くというのはね、(中略) アナウンスの話で面白くなったのは本当のリアリズムかどうか、どんな試合でも面白く聞こえるということはね⁴¹⁾。

野上も土岐も、事実の客観的な描写と乖離する実況に危惧を抱いているのである。

「野球話術実況」の“魅力”とともにある“危うさ”は、放送のプロである協会職員も感じていたことであろう。実際に松内は、矢部放送部長から「アナウンサーは何時も厳正なジャッチャーの立場になければならないからね」と指導されたことを認めている⁴²⁾。また、陰で後輩から「冗談ばかり言っている」と自分のアナウンスを非難されていたようだとも述べている⁴³⁾。

さらに、前記したように、甲子園で野球実況が始まるときに、これまですべてのアナウ

ンス原稿の事前チェックを受けていた逋信省から、「スポーツ実況は事実を伝えるものなので大目に見る」と言われていた。こうした大前提があったことを協会関係者が忘れるとは思えない。“危うさ”を認識していなかったと考えるほうが不自然であろう。

しかし、協会の指導は徹底しなかったようで、その後も松内の口調は変わることはなかった。それどころか、レコード化や雑誌への掲載を許可するなど、後押しするかのような態度まで示している。なぜ協会はこのような姿勢をとったのであろうか。

ここで思い出したいのが(4)で示した協会側の事情である。外国に比べて聴取者加入が進んでいないことを気にしていた協会は、「娯楽」の供給が効果的と認識しながらも、建前上なかなか増やせないという現実直面していた。そこに登場したのが「野球話術実況」なのである。49ページの図1を見ても分かるように、聴取者加入件数の折れ線グラフは、この時期に角度がこれまでよりやや上向きになっている。実際に獲得にどれほど貢献したかは分からないが、協会にとっては、実況と同じ時期に加入件数が増えているという事実が重要だったのである。

これらのことを考えると、「野球話術実況」が実況の原則である客観性から逸脱していることに“危うさ”を感じながらも、その“魅力”を捨てることができずに、「容認」という形で関わってきた協会の思惑が推測される。

(6) ブーム終焉の検証

先に述べたようにブームは30年代半ばに終息する。この理由について竹山や山口は、聴取者が野球放送に「面白さ」よりも「正確

さ」を求めるようになったためなどと述べている⁴⁴⁾。これも大きな理由の一つであろうが、本稿では協会の「容認」という事象をもとにしてさらなる解釈を試みたい。

図1を見ても分かるように、ブームが終焉する1934年には加入が200万件近くとなる。このころから「加入をいかに増やすか」という論調が当時の協会の放送研究誌や『ラジオ年鑑』から少なくなっていくことなどから、協会として聴取者獲得が以前ほど重要ではなくなっていることが分かる。

また、満州事変(1931年9月)以降、協会に対する国の締めつけが強化されていた。例えば逓信省は、1933年10月に放送の用語・口調について、「中正平調ヲ旨トシ濫リニ主観ヲ交ヘヌ」よう協会に通達している⁴⁵⁾。この通達は放送全体に対してのものだが、野球実況の関係者には思い当たる節があったのではないだろうか。さらに1934年5月には中央集権化につながる協会の大幅な組織改正が行われた。この中で、逓信省・内務省・文部省の職員が部外委員となる、全国中継の番組内容を定める「放送編成会」が設置されるなど、「国策」重視の傾向が鮮明になっていく。

加入状況に見通しがつき、国の関与が強まるなかで、「野球話術実況」を容認し続ける必要もなくなったのであろう。協会は1934年から、これまで局別に採っていたアナウンサーを一括して採用するようになり、採用後に約3か月にわたって「アナウンサー学校」で組織的に養成するようになる。ここでは用語の統一性や口調の客観性が重視され、「野球話術実況」のような語り口が継承されることはなかった。

(7) 今後の「過剰な実況」の分析のために

「野球話術実況」の分析の最後に、このような「過剰な実況」の今後について触れたい。

メディア社会学に、実況の「非媒介性」と「過度媒介性」という言葉がある。これは実況に、アナウンサーが話していることをできるだけ意識させない方法と、その存在を必要以上に意識させる方法が存在するという視点である。これを提唱している高井昌吏は、視聴者は基本的に「何も媒介していないという感覚」(非媒介性)を好むが、時に「まさしく何か媒介しているという感覚」(過度媒介性)を受け入れることもあり、その場合には何らかの社会的背景が影響しているとしている。

「過度媒介性」が受け入れられた例として高井は、1980年代の過剰に演出された古舘伊知郎のプロレス実況を挙げている。そしてこの背景には、同時代に人気となったフジテレビのバラエティー番組『オレたちひょうきん族』でみられたような、普段は画面に出ることのないディレクターやカメラマンといった媒介主体自身が登場して番組を盛り上げるという「みせていることをみせる」という表現方法が親しまれていたことがあるとしている⁴⁶⁾。

高井自身も示唆しているように、この概念には議論の余地も残っている。しかし、「過剰な実況」はイレギュラーであり、それが受け入れられるとしたらそれなりの理由があるという考え方は、本稿の主張と重なるところもあり、興味深い指摘である。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、今後、スポーツ実況がさらに増えていくと思われる。そんな中で「過剰な実況」が再び出現する可能性もある。そのとき

の分析には、本稿の考察が一つの例として役立つかもしれない。

4 まとめ

これまでの内容をまとめる。本稿ではまず、「娯楽」番組の割合が減少している時期と「野球話術実況」の全盛期が重なることを示した。そして、この事実をベースとして、以下の3つの視点からこの実況の人気の背景を探った。

①聴取者

聴取者調査の結果によると、もともと「娯楽」番組の需要と供給に乖離があったうえ、年々それが広がっていった様子が分かる。投書からは、「娯楽」の少なさに不満を持っていたことも判明した。

②松内則三

アナウンスのあり方において聴取者の意向を重視していた。語り口を常に聴取者本位で調整し、野球競技の経験不足から独自のアナウンスを模索していた松内にとって、野球実況を「講談調」にした理由の一つに①が関係した可能性が高い。

③日本放送協会

外国に比べて、聴取者加入が進んでいないことが経営課題だった。進まない要因の一つが「娯楽」の少なさだと認識していたと考えられるが、「社会の公器」という建前上、いたずらに「娯楽」を増やすわけにもいかなかった。そこに登場したのが「野球話術実況」であり、客観性に疑問符がつく実況ながらも容認する姿勢をとったと思われる。

以上のことを踏まえて、本稿の主張をあらためて述べる。先行研究で指摘されているよ

うに、「野球話術実況」の人気の背景には、「講談調」という日本人になじみのある口調が広く受け入れられたことがあるのは間違いない。これに先述の①聴取者の要望と、②それに応えようとする松内の姿勢、そして③それを容認する協会の態度、の3つの視点を加えることで、「野球話術実況」の誕生と継続の解釈に厚みが増し、従来の野球ファン以外を取り込んで大人気となった背景をより明確にできるのではないだろうか。

今回の「野球話術実況」の考察では、実況内容だけにとらわれず、広く放送全体を見渡すことを心がけた。特に、その背景として聴取者意向との乖離に注目した。

「娯楽」番組の割合がその後増えることがなかったことから分かるように⁴⁷⁾、戦前の放送は次第に聴取者の意向を置き去りにして「国策」の道に進むことになる。「野球話術実況」は、こうした流れが始まりつつあった時期に、松内と協会が提供した“聴取者サービス”だったと捉えるべきなのかもしれない。

(本稿中、旧かなづかいを新かなづかいに、旧字体を新字体に改めた箇所がある。また、読みやすいように、原文に振り仮名や句読点をつけた箇所もある)

(こばやし としゆき)

注：

- 1) 竹山昭子『ラジオの時代』(世界思想社、2002年)
- 2) 橋本一夫『日本スポーツ放送史』(大修館書店、1992年)
- 3) 山口誠「スポーツ実況のオラリティ」『関西大学社会学部紀要』第34巻第3号(2003年)
- 4) 南利明「早慶戦と松内則三(1)～(4)」『文研月報』(1982年11、12月号、1983年2、3月号)
- 5) 前掲『ラジオの時代』187頁
- 6) 前掲「スポーツ実況のオラリティ」『関西大学

- 社会学部紀要』181頁
- 7) 前掲『ラジオの時代』183頁
 - 8) 日本放送協会編『20世紀放送史 上』(2001年)59頁などでは、第13回全国中等学校優勝野球大会の実況を「日本最初のスポーツ中継」としているが、山口は前掲の論文の中で、1927年6月に京城放送局が行った相撲の実況放送が日本で最初の実況放送だとしている。
 - 9) 南利明「野球放送ことはじめ」『文研月報』(1978年8月号)42頁
 - 10) 「ことはじめ早慶戦実況放送」『放送文化』(1967年4月号)60頁
 - 11) 山口誠「『もの語り』の座標軸を立体化する」『日本近代文学』(2003年5月15日号)132頁
 - 12) 日本放送協会『昭和六年ラジオ年鑑』(1931年)236, 238頁
 - 13) 下郡山信吉「放送プログラム最近の傾向」『調査時報』(1932年5月15日号)95頁
 - 14) 日本放送協会編『日本放送史 上』(1965年)232頁
 - 15) この雑誌には、河西の早明戦の放送も29ページにわたって掲載されている。
 - 16) 前掲「スポーツ実況のオラリティ」『関西大学社会学部紀要』199頁
 - 17) 「いま、講談&浪曲が面白い!」『週刊ポスト』(2017年9月15日号)14頁
 - 18) 日本放送協会編『放送夜話』(日本放送出版協会, 1968年)161-162頁
 - 19) 「アナウンサーの座談会」『放送』(1936年4月号)44-45頁。座談会の中で「今は少なくなっているが」などの言葉が出ており、全盛期を振り返って意見を述べている様子がうかがえる。
 - 20) 和田信賢『放送ばなし』(青山商店出版部, 1946年)52頁
 - 21) 当時の正式名称は「慰安」であるが、同じ意味で「娯楽」という表現も所々で見られる。本稿では想起しやすいように「娯楽」で統一する。
 - 22) 基本的には、札幌・仙台・東京・名古屋・大阪・広島・熊本の各放送局の第1・第2放送の合計だが、当然それぞれの開局前は含まれていない。例えば、1925年は東京・名古屋・大阪の第1放送の合計となる。
 - 23) 『昭和十二年ラジオ年鑑』(1937年)9頁
 - 24) 日本放送協会関西支部編『ラヂオ聴取者は何を好むか?』(日本放送出版協会関西支社, 1932年)33頁
 - 25) 『昭和六年ラジオ年鑑』742-743頁
 - 26) 「調査 東海支部加入者聴取状況調査統計」『調査月報』(1928年7月号)55頁
 - 27) 「聴取希望種目の調査に就いて」『調査時報』(1931年8月1日号)12頁
 - 28) 「投書調査」『放送』(1935年9月号)83-89頁
 - 29) 「先輩に訊く近頃のスポーツ放送」『放送文化』(1950年9月号)26頁
 - 30) 米田武「昭和初期のアナウンサーとアナウンスメント(1)」『文研月報』(1982年2月号)39頁
 - 31) 前掲「スポーツ実況のオラリティ」『関西大学社会学部紀要』188-189頁
 - 32) 松内則三「早慶戦アナウンス物語」『野球界』(1930年10月号)62頁
 - 33) 中山龍次『欧米に於ける放送事業 調査報告』(日本放送協会関東支部, 1931年)13-14頁
 - 34) 高橋桂二「続放送夜話」『調査時報』(1932年4月15日号)353頁
 - 35) 『昭和十年ラジオ年鑑』326-327頁
 - 36) 「米国の嗜好調査」『調査時報』(1927年7月号)21頁
 - 37) 『昭和十年ラジオ年鑑』325-326頁
 - 38) 山口誠『英語講座の誕生』(講談社, 2001年)29頁
 - 39) 瀬戸英一「放送左様」『調査時報』(1932年5月15日号)86頁
 - 40) 野上弥生子「一つの希望」『調査時報』1932年1月1日号)30頁
 - 41) 前掲「アナウンサーの座談会」『放送』45頁
 - 42) 松内則三「早慶野球放送失敗記録」『中央公論』(1932年6月号)363頁
 - 43) 松内則三「スポーツ放送の草分け時代」『言語生活』(1969年10月号)89頁
 - 44) 前掲『ラジオの時代』186-187頁、および前掲「スポーツ実況のオラリティ」『関西大学社会学部紀要』204頁
 - 45) 日本放送協会編『放送五十年史 資料編』(1977年)670頁
 - 46) 高井昌史「スポーツ中継とメディアの媒介性」、高井昌史・谷本奈穂編『メディア文化を社会学する』(世界思想社, 2009年)8-19頁
 - 47) 1941年ごろから「娯楽」の割合が激増するが、これは山口(2001年)も指摘しているように、番組検閲が厳しくなって「報道」「教養」だけでは時間を埋めることが難しくなり、無難な音楽を流すようになったことによる。